

山梨県笛吹市芦川町の集落形成について —本家分家による形成過程の把握—

Keywords

山梨県笛吹市芦川町 茅葺民家
集落形成 本家分家

第1章 研究背景と目的

山梨県笛吹市芦川町は、甲府盆地と富士山麓との中間に位置している。溪谷に沿って茅葺民家が多く建ち並び、上芦川・新井原・中芦川・鶯宿の4集落が点在している。重要伝統的建造物群保存地区の指定に向けて芦川町の実測調査を行い、本家分家から集落形成過程を把握することを目的とする。

第2章 研究方法

芦川町に現存する民家の実測調査・聞き取り調査を行い、平面図・断面図・復原平面図を作成する。調査で判明した平面形式と本家分家を集落形成史と照らし合わせ、集落の現状を把握する。

第3章 芦川町概要

芦川町は、山梨県の甲府盆地と富士山麓を遮るようにそびえる御坂山地のほぼ中央に位置する。東西に11km、南北に4kmの範囲であり、標高1000～700mの芦川溪谷沿いに上芦川・新井原・中芦川・鶯宿の4集落が並ぶ。2006年に笛吹市に編入し芦川村から芦川町となった。時代を経るにつれて出稼ぎや過疎化などの原因により人口は減少し、山梨県笛吹市住民基本台帳行政区別人口統計表（平成21年8月末日現在）による現在の芦川町の状況は、人口511人、世帯数236世帯である。



図1 芦川町配置図

第4章 2009年度の実測調査

芦川町において、2009年3月21～23日に6棟の民家と3棟の寺社、8月3～5日に6棟の民家を調査した。今回の調査では民家12棟のうち10棟が鶯宿に位置する。鶯宿では、芦川本流に沿って市川道（県道36号）が東西に貫く。市川道と芦川本流に沿って民家が立ち並び、市川道から南北に伸びた坂道にも民家が段々に連なる。



K06028

尾崎 渉

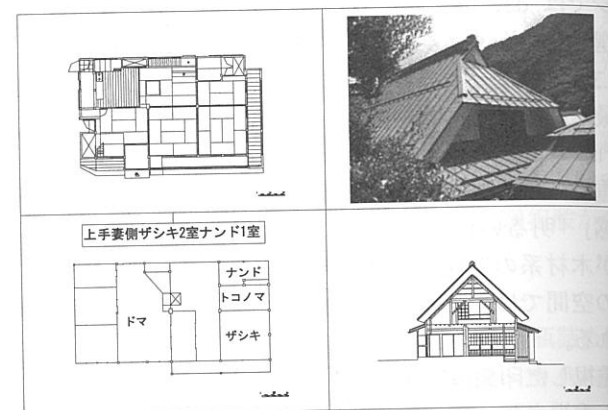


図2 実測図面・写真

(o24 立沢秀野宅 左上：1階平面図、左下：復原平面図)

第5章 本家分家の概要とその特徴

5-1) 芦川町における本家分家慣行

芦川町では次男、三男が結婚を契機に分家し、その際本家が屋敷と畑一筆を分け与える慣習があった。本家を大家（オオヤ、オモヤ）、分家を新屋（シンヤ）と呼ぶ。本家分家慣行には様々な形態が存在するが、本研究ではこの関係を本家・分家と呼ぶこととする。

5-2) 配置的特徴

参考文献『芦川の民俗』によると、隠居する場所は独立の屋敷をオモヤの近くや同一敷地内に建てることが多いと記載されており、上芦川西村にこのような分家が多くみられる（図3）。



図3 『芦川の民俗』（日本大学経済学部民俗学研究会 昭和57年度中間報告書）による本家分家関係（本研究で作成した配置図にプロット）

5-3) 平面的特徴

全集落の分家13棟中7棟が上手妻側ザシキ1室ナンド1室の平面形式である。『山梨県の民家』によるとこの平面形式は芦川町が位置する国中地域の古式な平面形式であるとされているが、上手妻側ザシキ1室ナンド1室の小規模民家は時代が下ってから経済的な事情によって意図的に建てられていたことが明らかになっている。

第6章 上芦川の集落形成と本家分家関係

6-1) 上芦川の集落形成過程

慶長期から天保期にかけての上芦川集落の形成過程は松尾絵里「山梨県笛吹市芦川町における上芦川集落の復原研究」（2008年度芝浦工業大学卒業論文）により明らかにされており、以下に簡潔にまとめる。

慶長期…慶長期の上芦川には集落の西側に口留番所が設けられ、西村のみであった。東林寺は現在の諏訪神社付近に立地し、西村の雁行部付近に集落を形成していた。

天保期…天保期の絵図では口留番所が東へと移動している。東林寺も東に移り、集落も東へと発展していく。集落の東には、小物成地と呼ばれる東村が形成された。

慶長7(1602)年検地帳より



天保14(1843)年絵図より

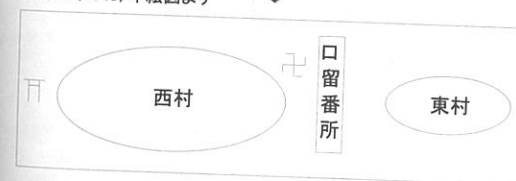


図5 上芦川の集落形成 略図（上：慶長期、下：天保期）

6-2) 本家分家の分布

史料と聞き取り調査から、上芦川集落において現在判明している本家分家をプロットする。

まず2007～2009年の聞き取り調査で判明した本家と分家をプロットする。さらに日本大学報告書『芦川の民俗』に記載された本家分家関係を加える。

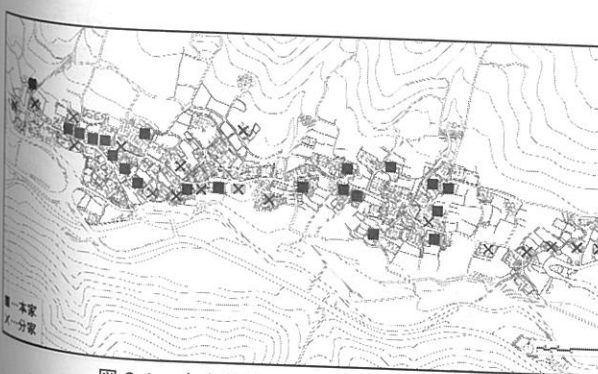


図6-A 本家分家の分布（上芦川集落）

図6-Aより、本家分家の分布は西村と東村で分かれる。西村は「シバオコシ（芝起こし）」と呼ばれる部落の開拓者を中心に本家が連なり、その周囲に分家が分布する。東村では本家から東に離れた位置に分家が集中する。

6-3) 性別の分布

つづいて上芦川集落の性別のプロットを行うことで、本家分家がどのような姓名で構成されているかを明らかにする。上芦川集落は「霜村」「市川」「原」の姓名が多くみられる。そこで現在の配置図の民家を①霜村姓②市川姓③原姓の3種に分類し、図示する（図6-B）。

図6-Bより、西村北側に市川姓が集まり、西村南側に霜村姓が集まっている。東村は原姓を中心に構成されていることが見て取れる。

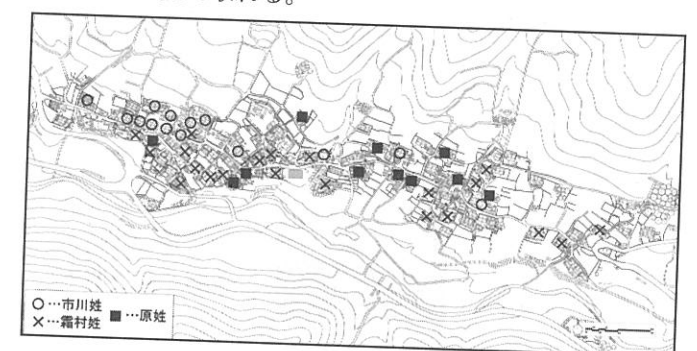


図6-B 性別の分布（上芦川集落）

6-4) 本家分家4タイプの分類と集落形成

以上を4つのタイプに分類する。

本家Ⅰ……………「芝起こし」（開拓者）を中心とした集落西側に位置する市川姓・霜村姓の本家
分家Ⅰ……………本家Ⅰの周辺に分布する市川姓・霜村姓の分家

本家Ⅱ……………集落東側にまとまる原姓の本家
分家Ⅱ……………本家Ⅱの東に位置する分家

図6-Cに示した上芦川集落の検討により、本家分家の分布は集落形成と合致し、以下のようになる。

慶長期（17世紀初期） 草分けであるシバオコシ2棟を中心に広がる本家Ⅰ→周囲に近接して建設された、本家Ⅰから出たと考えられる分家Ⅰ

近世中期以降（18世紀以降） 口留番所・東林寺の移動（元禄6=1693年）に伴い、東村に新しく入ってきた本家Ⅱ→さらに東へ敷地を求めて展開する分家Ⅱ



図6-C 本家分家4タイプの分類（上芦川集落）

6-5) 本家分家 4 タイプの事例

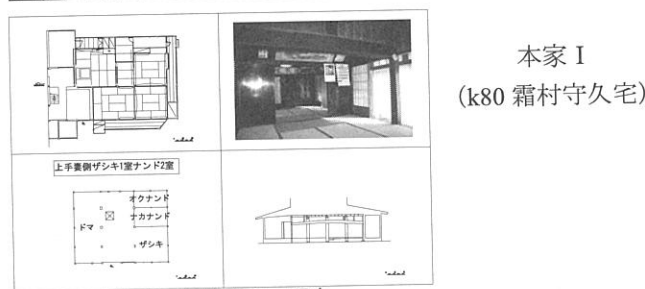


図 7-A 実測図面・写真

分家 I
(k82 霜村
千代晴宅)

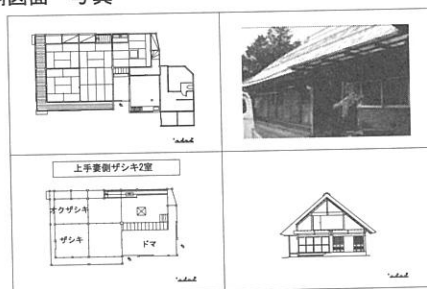


図 7-B 実測図面・写真

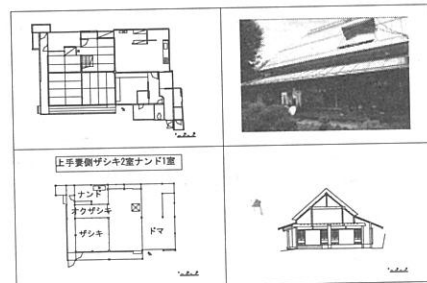


図 7-C 実測図面・写真

分家 II
(k47 今井寛宅)

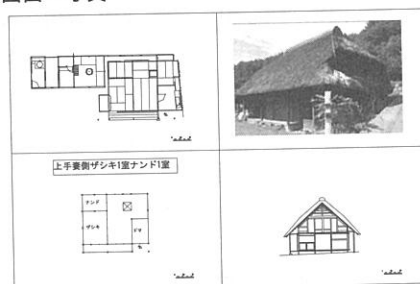


図 7-D 実測図面・写真

6-6) 平面形式の分布と集落形成

調査によって判明した平面形式と建設年代をプロットし、結果を表 1 に示す。西村には新しい平面形式である上手妻側ザシキ 2 室 (図 7-B) が多く、実際に明治期以降に建設された民家で占められている。反対に東村では上手妻側ザシキ 1 室ナンド 1 室の古い平面形式 (図 7-D 新屋) も残っている。集落は西村から東村に広がるが、集落の中心はシバオコシが位置する西村に固定されている。

表 1 平面形式と建設年代の分布 (上芦川集落)

平面形式	西村	東村	建設年代	西村	東村
ザシキ1ナンド1	1	3	18世紀以前		3
ザシキ2ナンド1	2	6	19世紀		1
ザシキ2	4		明治期以降	7	5

第 7 章 鶯宿集落への適用

歴史的資料が乏しく集落形成過程が不明瞭な鶯宿集落において、上芦川集落で行った第 6 章のプロセスを適用する。ここでは史資料から集落形成を論証することに加え、前章で示した本家分家の分類に倣い鶯宿集落配置図にプロットすることで集落形成の考察を行う。

7-1) 鶯宿の集落形成過程

近世の鶯宿集落の変容は佐々山浩「山峡地域における集落形成過程と住居形態に関する復元的考察」(2008 年度東京理科大学大学院修士論文) で考察がなされている。《民家》「宇古やしき」の記載がみられ、早い時期から芦川南岸に民家が分布していたと考察されている。《寺社》 絵図の比定により、元来は御崎明神が集落中心部に、諏訪神社が集落西部に位置していたことが明らかになった。①では御崎明神がシバオコシ屋敷 (大勝家) に置かれ、②では御崎明神が屋敷とは別の位置に、③では諏訪神社が御崎明神の位置に移って (万延元=1860 年)、諏訪神社敷地にオダイジン (宮川紋蔵) の家が建った。《シバオコシとオダイジン》 シバオコシ屋敷 (大勝家) は集落中央にあった。もとの諏訪神社の敷地にはオダイジンの大型民家が現存している。

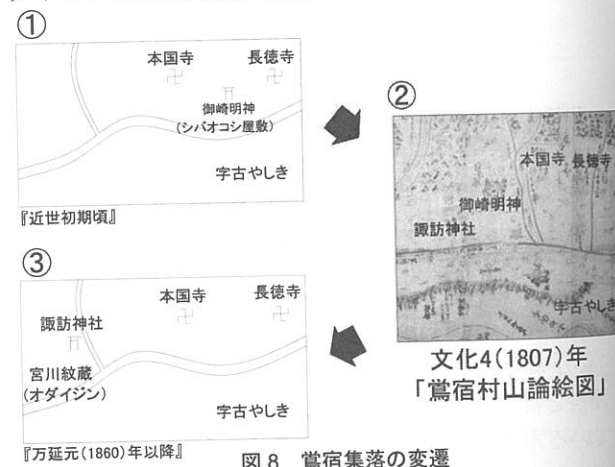


図 8 鶯宿集落の変遷

7-2) 本家分家の分布

上芦川のプロセスを用い、本家分家をプロットする。図 9-A より、分家 13 棟中 11 棟が芦川北岸に立地していることから、芦川北岸は後に発展したと考えられる。



図 9-A 本家分家の分布 (鶯宿集落)

7-3) 性別の分布

同様に性別での分類とプロットを行う。鶯宿においては①シバオコシと伝わる大勝姓②オダイジンの家が残る宮川姓の 2 種類に分ける。

図 9-B より、大勝姓は南西に集中していることがわかる。シバオコシの屋敷が立地していたとされる集落中央部には現在大勝姓はみられない。西側に移動したのである。分家 13 棟中 10 棟が宮川姓であることから、芦川北岸に発展していったのが宮川姓であることがわかる。

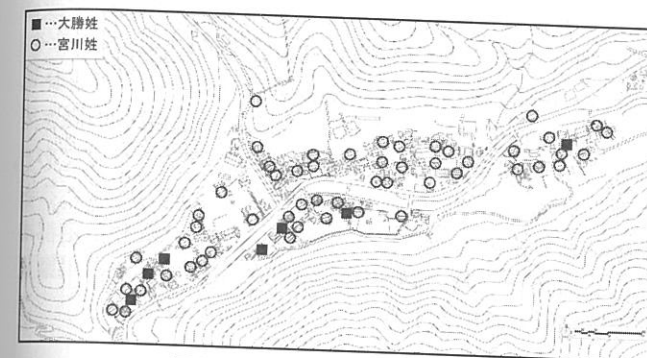


図 9-B 性別の分布 (鶯宿集落)

7-4) 本家分家 4 タイプの分類と集落形成の比較

7-1)~7-3)より、上芦川集落の分類に倣い、本家分家を 4 タイプに分類する。

本家 I 集落南西側にまとまる大勝姓の本家
分家 I 本家 I に近接する大勝姓の分家
本家 II 集落全体に広がる宮川姓の本家
分家 II 芦川北岸に位置する本家 II の分家

図 9-C では集落中央に宮川姓が、集落西側には大勝姓の本家が集まっており集落形成過程とは逆の結果である。

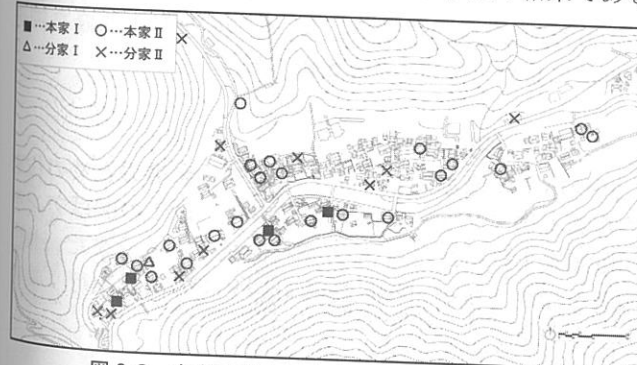


図 9-C 本家分家 4 タイプの分類 (鶯宿集落)

7-5) 本家分家 4 タイプの事例

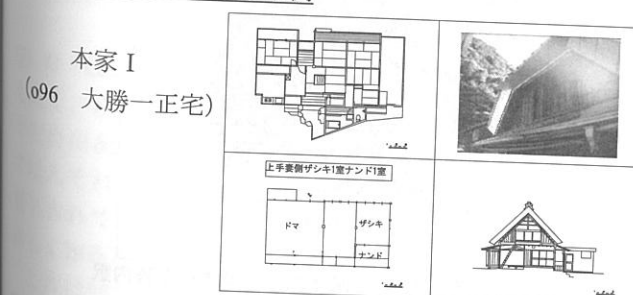


図 10-A 実測図面・写真

本家 II
(019 立沢茂宅)
(旧宮川紋蔵宅)

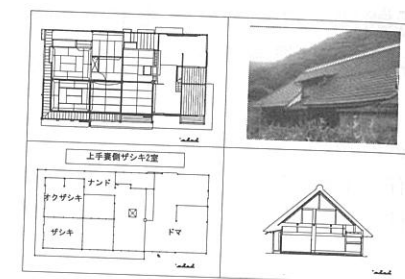


図 10-B 実測図面・写真

7-6) 平面形式の分布と集落形成

集落中央の 4 棟は明治期以降に建設された宮川姓であり、うち 2 棟がザシキ 1 室ナンド 1 室の平面形式を持つため、シバオコシ屋敷 (大勝家) が集落西側に移動した後の分家であると考えられる。鶯宿集落では上芦川と相反し平面形式と集落形成過程が一致する。

シバオコシ移動前 図 8-①における御崎明神周辺 (大勝姓) と「宇古やしき」周辺に広がる本家 (宮川姓)

シバオコシ移動後 図 8-②の御崎明神とともに西に移動した本家 (大勝姓) → オダイジンを中心として芦川北岸に広がる本家 (宮川姓) → 芦川北岸の分家 (宮川姓)

表 2 平面形式と建設年代の分布 (鶯宿集落)

平面形式	東	西	中央	建設年代	東	西	中央
ザシキ1ナンド1	3	3	2	18世紀以前	2		
ザシキ2ナンド1		2	2	19世紀	1	4	
ザシキ2		1		明治期以降		1	4

第 9 章 まとめ

《上芦川集落》

「シバオコシ定住型」

- ・本家分家、各姓が集落形成史と一致
- ・シバオコシ周辺の平面形式の更新

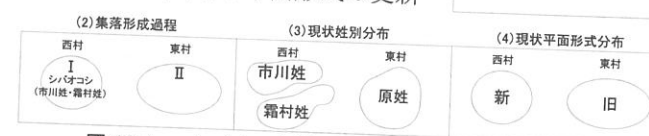


図 10-A シバオコシ位置と集落特性 (上芦川集落)

《鶯宿集落》

「シバオコシ移住型」

- ・平面形式が集落形成史と一致
- ・移住に伴う姓名の移動

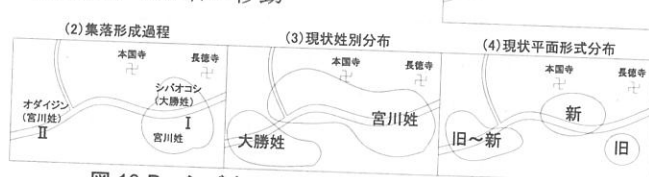


図 10-B シバオコシ位置と集落特性 (鶯宿集落)

主要参考文献

- ・日本大学経済学部民俗学研究会「芦川の民俗 一山梨県東八代郡芦川村一」昭和 57 年度中間報告書
- ・佐々山浩「山峡地域における集落形成過程と住居形態に関する復元的考察」2008 年度東京理科大学大学院修士論文
- ・松尾絵里「山梨県笛吹市芦川町における上芦川集落の復原研究」2008 年度芝浦工業大学卒業論文